

研究報告 REPORT ON THE RESEARCH AND PRACTICE

小学校との連携による日本画教育の意味 (1)

—学部生・大学院生を軸とした社会発信の試み—

Japanese Painting Education through Collaboration between Elementary School and University of Arts (1)

Wataru Kawashima 川嶋 渉

(Kyoto City University of Arts 京都市立芸術大学)

Taku Mitsuhashi 三橋 卓

(Kyoto City University of Arts 京都市立芸術大学)

Manabu Yokota 横田 学

(Kyoto City University of Arts 京都市立芸術大学)

Shimpei Takeuchi 竹内 晋平

(Nara University of Education 奈良教育大学)

<あらまし>

これまで本学・日本画研究室においては、社会への芸術発信や学部生・大学院生の専門性向上等を意図した取組として、小中学校における毛筆画指導の活動を進めてきた。本稿では、それらの取組のうち洛西地域に所在する京都市立境谷小学校において2012年度より行ってきた毛筆画指導について概観するとともに、参画した学部生・大学院生に対する教育的意義について考察する。

<キーワード>

日本画教育、小大連携、毛筆画指導、臨画、社会発信

1. はじめに

近年、大学による地域貢献活動が活況を呈している。教育・研究活動に加えて、このような地域貢献活動が求められる多くの大学がそれに取り組んでいる背景には、人口構造に関する要因や地域経済との関係による要因、そして大学のあり方に関する要因等が存在することが指摘されている¹⁾。地域の実状や大学の専門分野等の立ち位置によって異なる事情があると考えられるが、芸術系大学においても地域貢献活動の要請は高まりつつあることは例外ではないといえよう。

本学・日本画研究室では2008年より、京都市内を中心とした小中学校における日本画指導等により、教員の専門性を生かした特色ある地域貢献活動を展開してきた。

しかし、本学・日本画研究室が意図しているのは、大学教員や学生による純粋なボランティアとしての地域貢献活動ではない。地域社会において美術的な価値を創出することを芸術系大学が担うだけでなく、学部生・大学院生が児童・生徒に日本画教育を行う現場を経験することによって、自身の芸術的専門性を高める契機とする

ことを目的としている。本稿においては、これまで5カ年にわたって本学と京都市立境谷小学校とが芸術連携として行ってきた毛筆画指導について概括し、2016年度の実践を事例として学部生・大学院生への教育的効果について考察することとする。

2. 本学と京都市立境谷小学校との芸術連携事業としての毛筆画指導

京都市西京区・洛西ニュータウンに位置する京都市立境谷小学校は、本学から至近の徒歩圏内である。2011年9月、本学・教職課程研究室と境谷小学校との連携によって、本学の卒業生が小学校内で制作活動を行う「境谷小レジデンス」がスタートしている²⁾。このような連携体制に基づき、2012年には第1回目の図画工作科の授業における毛筆画指導が企画された。この企画は当時、本学・美術研究科博士(後期)課程に在籍していた竹内の修了研究³⁾の一部として、そして京都市立境谷小学校の校内研究を兼ねる形で立案された。その概要は下記のとおりである⁴⁾。

- ・日 時： 2012年6月
- ・題 材 名： 黒と白とであざやかに(計7時間)
- ・対象学年： 3年生(33名)
- ・指 導 者： 3年生担任、日本画研究室教員、日本画研究室学部生・大学院生(11名)

毛筆画指導の対象となった3年生児童は、国語科の書写において毛筆学習を始めたタイミングでもあり、墨と筆を使用することを経験していた。毛筆画においては、書写での筆法に加えて墨の「濃淡」「にじみ」「かすれ」などに関する技法の習得が必要となる。このため、この毛



図1 粉本「燕」



図2 粉本「狗子」



図3 粉本「湿地蛙」



図4 粉本「葡萄」

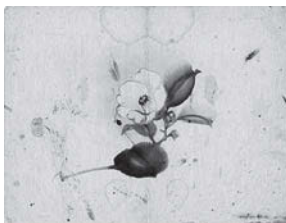


図5 粉本「山茶花」



図6 実演指導の様子

筆画指導においては粉本を使用して、3年生児童がこれを臨写する活動を設定することとした。実際に使用した粉本は、本学の前身である京都府画学校の東宗教員を務めた望月玉泉（1834-1913）が日本画指導のために描いたと考えられる5種である（図1～5。いずれも本学・教職課程研究室所蔵）。指導にあたっては、実物から電子スキャナーによって作成したデジタルデータをもとに、A3用紙にカラー印刷したものを児童全員に配布して使用に供した。

この毛筆画指導に際しては、3年生児童に対して日本画研究室教員が直接指導する場面をできるかぎり抑え、学部生・大学院生が児童の前面に立って技法の指導を行うことを意図した。具体的には、各学部生・大学院生が前述の粉本の1つを担当し、児童の前で描いて見せる実演指導を行うこととした（図6）。このため、学部生・大学院生は事前に粉本に関する研究を行い、運筆や筆順などの検討を進めており、日本画研究室教員がその指導にあっている。学部生・大学院生は、日本画研究室教員の専門性を自身の視点から3年生児童に伝える活動を通して、筆使いや調墨等の造形活動における感覚や認識の言語化を試みることとなる。このような造形活動（日本画実技）をめぐる感覚や認識に関する言語活動の経験は、学部生・大学院生の専門的力の形成につながるのではな

いかと考えた。

上述の意図によって展開された学部生・大学院生を軸とする京都市立境谷小学校における毛筆画指導は、2012年度以降も継続し、現在に至っている。各年度の実施状況は下記の通りである。

・2013年度

2013年6月実施、学部生・大学院生：4名参加

・2014年度

2014年6月実施、学部生・大学院生：4名参加

・2015年度

2015年7月実施、学部生・大学院生：5名参加

・2016年度

2016年11月実施、学部生・大学院生：5名参加

実施5年目を迎えた2016年度も、これまでと同様の形態で学部生・大学院生の専門的力形成を意図した毛筆画指導を展開している。次章においては、2016年度の京都市立境谷小学校における毛筆画指導に参加した大学院生に対して、どのような教育的効果があったのかについて論じることとする。

3. 学部生・大学院生を軸とした毛筆画指導の意義

2016年度に行った実践においても、これまでと同様の手続きによって3年生・図画工作科の授業内で毛筆画指導を行った。以下に各人員の役割分担等を時系列によって示す。

- 2016年9月 ・京都市立境谷小学校との打ち合わせ
(竹内／奈良教育大学)
- ・本学内での教員打ち合わせ
(川嶋・三橋・横田／以上 本学)
- 同年10月 ・京都市立境谷小学校での毛筆画指導
先行実施（「お手本との出会い」「自力で描いてみる」）（竹内）
- ・先行実施における児童からの質問・
反応等を日本画研究室に報告
(竹内・横田)
- ・児童の質問等をもとにした指導方法
の検討、および大学院生への実技指
導
(川嶋・三橋)
- 同年11月 ・日本画研究室の教員、大学院生によ
る毛筆画指導の本実施（「描き方を学
ぶ」）（川嶋・三橋・横田・竹内）
- 同年12月 ・今年度実践の総括および次年度の方
針策定（川嶋・三橋・横田・竹内）

今回の毛筆画指導は合計5時間の題材であり、具体的には「お手本との出会い」（使用する粉本を鑑賞し、学習のめあてをもつ段階／全1時間）、「自力で描いてみる」（選んだ粉本をもとにして臨写することに挑戦する段階／2時間）、「描き方を学ぶ」（日本画研究室の大学院生による実演・個別指導をもとにして運筆・調墨について学習する段階／2時間）の各段階によって構成されている。

本実践と位置付けた「描き方を学ぶ」においては、5名の大学院生が実演指導と個別指導を行う時間を設定している。それぞれの大学院生が担当する粉本を臨写する様子を演示し、その過程で運筆や調墨についての具体的な指導を口頭で行った（図7・8）。その際、大学院生は3年生児童に伝わりやすい説明となるよう、オノマトペを交える等、言語化の工夫を行う姿が見られた。実演指導の後、大学院生は描く事に挑戦する児童を個別に指導・支援する活動を行った（図9）。この時にも、これまでに習得した日本画実技に関する感覚や認識等を児童に伝達するために手を取って指導したり、手本を見せたりする様子が多く見られた。

あわせて90分間程度の毛筆画指導であったが、表現活

動に対する満足感が児童作品（図10）からうかがえるとともに、院生にとっては指導の前面に立つことによって日本画をめぐる感覚や認識を自覚したり、自身の経験をもとにしてそれらを再構築したりする契機になったのではないかと考えた。今回の毛筆画指導に関与することが院生の学びにどのように影響したのかについて検討するため、すべての実践が終了した後、大学院生に対して自身の専門的力量的形成に対してどのような効果があったのかについて質問したところ、以下のような5件の自由記述を得ることができた（原文から一部を抜粋。下線および番号は引用者による）。

「実は私たちが今回のワークショップのために何日か前から、制作の合間にコツコツと練習してきました。どうやって伝えようか、小学校三年生ってどんな感じだろう」11、そもそもまずお手本が描けないと」（大学院生 A）

「普段の制作では三次元の対象物を二次元的な線に置き換え、そのものの捉え方を探りながら絵を描い



図7 大学院生による実演指導



図9 大学院生から児童への個別指導



図8 同上



図10 3年生児童による臨写作品

ていますが、この「お手本を運筆する」という行為は古人の作品から美しい線を学びそれをまた自然に還元して対象を捉え直すことができるとも良い学びだと思っています^[12]」(大学院生 B)

「「教える」ということは、それを知っていないといけないので^[13]、自身で勉強するときには無い責任がついてくる。それは半ば強制的に自分自身の知識や技術を向上させるので、私は今回のワークショップに参加して良かったと思う」(大学院生 C)

「持っている個性を大切にしながら、新しいものを学び楽しむ^[14]。子どもたちが教えてくれるその姿勢を忘れず、制作に励みたいと思います」(大学院生 D)

「また、墨一色の運筆での絵づくりは、後から消したり描き直したりすることも出来ないのので一回の作業で決めていくことになります。そのため今回のワークショップで一筆一筆意識して描く墨絵に取り組んだことで、自分の制作でも筆の使い方や筆から絵の具が下りていく感覚がより身に付き意識出来るようになったと感じています^[15]。普段の制作を少し見直す良い経験にもなりました^[16]」(大学院生 E)

大学院生 A による自由記述のうち下線部【1】からは、毛筆画指導をすすめるにあたって、「コツコツと練習してきた」ことで習得した内容を児童に伝えるための方途について検討を行った様子をうかがうことができる。日本画の運筆指導においては筆圧や筆を動かす速さ、そして筆に含ませる墨の量など、感覚的に理解させることが求められる内容が含まれている。上記の記述はこの内容を伝達することの難しさへの気づきでもあると推察される。毛筆画指導を実施する前に大学院生が実際に行った実演指導のための練習では、「他者に感覚を伝えること」を意識して運筆方法の習得をめざしている姿が見られた。

また、大学院生 B の自由記述のうち下線部【2】では、実景を見て描くことと粉本をもとにして描くことを比較することによって、臨画の教育的意義について考察していたことを読み取ることができる。大学院生が毛筆画指導への参画を通して、「古人の作品から美しい線を学びそれをまた自然に還元して対象を捉え直す」という行為の意義について実感をもって理解することは、自身の制作活動を省察する契機となり、日本画の専門的力量形成にも資するものであると考えられる。

一方で、指導する立場を経験することによる専門的力量を形成することの重要性に対する気づき(下線部【3])や、大学院生自身が実技を学ぶことの意味に関する気づ

き(下線部【4])についても大学院生 C・D によって言及されている。これらの記述は、今回のワークショップと研究室での日常の日本画実技に関する学習とが有効に機能しあっていることを示唆するものであるといえる。

そして大学院生 E の自由記述においては、今回の毛筆画指導への参画によって「自分の制作でも筆の使い方や筆から絵の具が下りていく感覚がより身に付き意識出来るようになったと感じています」(下線部【5])と示され、自身の学びについての具体的な分析がなされている。毛筆画指導において大学院生 E は、「筆から絵の具が下りていく」という概念化が難しい感覚を小学校3年生に指導するため、そのような感覚を言語化したり実演指導したりすることを試みていた。このような経験によって、それまで曖昧であった日本画実技に関する感覚や認識等を概念化することができたと推察される。このような毛筆画指導に参画することによる大学院生に対する教育的効果は、「普段の制作を少し見直す良い経験にもなりました」(下線部【6])という大学院生 E による記述箇所に集約されているのではないかと考えられる。

4. 総括と今後の展望

ここまで、今年度で5年目を迎える京都市立境谷小学校との芸術連携事業としての毛筆画指導についての概括を行うとともに、2016年度に参加した大学院生に対する教育的意義についての考察を試みた。今年度のワークショップでは、小学校の児童に対して毛筆画指導を行う経験を通して複数の大学院生が専門的力量の大切さに改めて気づいていたことを自由記述から示すことができた。そして、本学における日常の日本画指導とワークショップとが有効に関連していることや、大学院生にとっても概念化が難しい感覚や認識を見つめ直す契機になったことを確認することができた点も本研究の成果であると考えている。

課題としては、大学と小学校の授業・行事等を効率的に調整して、双方が負担感なく芸術連携事業を継続するための方法を模索していくことがあげられる。具体的には、学部生・大学院生に対してどのようにして本ワークショップについての告知をし、どのようにして毛筆画指導にむけた体制を構築していくのが重要となる。また、指導対象となる小学校児童の描画に関するレディネスを共有することや、児童の実態について参加者全員が共有しておくための機会をどのようにして担保するのかについても、次年度以降に向けた検討課題になる。

これまで取り組んできた実績を活用し、さらに学部生・大学院生の学びを効果的なものにするためには、本ワークショップを本学・日本画教育のカリキュラムに位置付

けることが必要であると考え。運筆の実技や粉本の使用に関する日々の学習とワークショップとを関連付けることで、実技に関する高い教育効果を期待することができる。今後も芸術連携事業を継続し、日本画を地域社会に向けて発信することが学部生・大学院生の専門的力量形成につながる、実践的な学びの場としていきたい。

<付 記>

本研究は、京都芸術教育コンソーシアム・京都芸術教育研究事業の取組として実施しています。

註

- 1 長田進「地域貢献について大学が果たす役割についての一考察」、『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』、第26号、2015、pp.21-23

- 2 京都市立芸術大学美術学部教職課程研究室『境谷小レジデンス 京都市立芸術大学と京都市立境谷小学校1年半の記録』、京都市立芸術大学、2013、p.2
- 3 竹内晋平「子どもからの情報発信による芸術の社会化－日本美術の題材化を視点として－」、京都市立芸術大学審査学位論文等（博士）、2013
- 4 2012年度の実践に関する分析は、前掲3)の所収であるとともに、下記論文においても詳細に報告している。
竹内晋平「造形活動における児童の感受を通した芸術発信Ⅱ」、『大学美術教育学会誌』、第45号、2013、pp.207-214

図版出典

図1～5 望月玉泉粉本（明治時代）、京都市立芸術大学美術学部教職課程研究室 所蔵

図6～10 筆者撮影

- ※ 図1～6は下記学会誌に掲載された論文が初出であり、同論文からの転載である。
竹内晋平「造形活動における児童の感受を通した芸術発信Ⅱ」、『大学美術教育学会誌』、第45号、2013、pp.207-214

